

石上神宮神宝伝承小考

篠川 賢

はじめに

古代の石上神宮については、王権の奉斎した神宮とみるのが通説的理解といつてよいであろう。しかし一方では、物部氏の氏神を祀った物部氏の神宮であるとの見方も広く行われている。

たしかに、『先代旧事本紀』によれば、石上神宮を奉斎したのは物部氏であつたとされる。⁽¹⁾「天孫本紀」の六世孫の伊香色雄命の条には、「此命、春日宮御宇天皇御世以爲大臣。磯城瑞籬宮御宇天皇御世詔大臣、爲班神物、定天社国社、以物部八十手所作祭神之物、祭八十万群神之時、遷建布都大神社於大倭国山辺郡石上邑。則天祖授饒速日尊、自天受来天璽瑞宝、同共藏斎。号曰石上

大神。以為「国家」亦為「氏神」崇祠為「鎮」。則皇后・大臣奉「齋神宮」とあり、崇神朝に伊香色雄命が「石上神宮」を建てて奉齋したと記されている。しかし、これを事実の伝えとみるわけにはいかないであろう。⁽²⁾

本稿では、まず、記紀の石上神宮神宝伝承を検討し、石上神宮の奉齋者（主齋者）が天皇（大王）であったことを確認し、次いで、神宝の管掌形態について考えるところを述べることにしたい。

一 神宝伝承の検討

石上神宮の神宝伝承については、『日本書紀』垂仁天皇三十九年十月条と、続く八十七年二月辛卯条に次のようにみえている。

(1) 卅九年冬十月、五十瓊敷命、居於茅渟菟砥川上宮、作劍一千口。因名其劍、謂川上部。亦名曰「裸伴」。〈裸伴、此云阿箇播娜我等母⁽³⁾。藏于石上神宮也。是後、命五十瓊敷命、俾主石上神宮之神宝。〉一云、五十瓊敷皇子、居于茅渟菟砥河上。而喚鍛名河上、作大刀一千口。是時、楯部・倭文部・神弓削部・神矢作部・大穴磯部・泊檀部・玉作部・神刑部・日置部・大刀佩部・并十箇品部、賜五十瓊敷皇子。其一千口大刀者、藏于忍坂邑。然後、從忍

坂_二移_一之、藏_二于石上神宮_一。是時、神乞之言、春日臣族、名市河令_レ治。因以命_二市河_一令_レ治。是今物部首之始祖也。〕

(2) 八十七年春二月丁亥朔辛卯、五十瓊敷命、謂妹大中姫曰、我老也。不能_レ掌_二神宝_一。自_レ今以後、必汝主焉。大中姫命辞曰、吾手弱女人也。何能登_二天神庫_一耶。〔神庫、此云保玖羅。〕五十瓊敷命曰、神庫雖_レ高、我能為_二神庫造_レ梯_一。豈煩_レ登_レ庫乎。故諺曰、天之神庫随_二樹梯_一之、此其縁也。然遂大中姫命、授_二物部十千根大連_一而令_レ治。故物部連等、至_二于今_一治_二石上神宝_一、是其縁也。(後略)

(1)の本文によれば、五十瓊敷命は菟砥川上宮で作った劍一千口を石上神宮に納め、その後、垂仁天皇は五十瓊敷命に命じて石上神宮の神宝を掌_レらせたとある。ここでは、石上神宮の奉斎者(主斎者)が天皇と認識されていることは明らかである。また(2)においては、神宝の管掌者が、五十瓊敷命からその妹の大中姫命を介して物部十千根大連に変わったというのであり、物部氏が石上神宮の主斎者と述べているのではない。

もちろん、垂仁朝のこととして記される(1)(2)の記事内容を、そのまま事実とみることはできないのであるが、『日本書紀』の編纂段階において、石上神宮の奉斎者が天皇と認識されていたことは間違いないといえよう。

なお、五十瓊敷命は、垂仁天皇十五年八月朔条には五十瓊敷入彦命とみえ（この条が初見）、垂仁天皇と皇后の日葉酢媛命とのあいだの第一子（第二子は大足彦尊、のちの景行天皇）であるとされる。また、同三十年正月甲子条には、「天皇詔五十瓊敷命・大足彦尊曰、汝等各言情願之物也。兄王謚、欲得弓矢。弟王謚、欲得皇位。於是、天皇詔之曰、各宜随情。則弓矢賜五十瓊敷命。仍詔大足彦尊曰、汝必繼朕位」という説話が載せられており、垂仁天皇の皇子のなかでは、景行天皇と並ぶ地位にあつたと伝えられる人物である。またこの説話からは、五十瓊敷命が王権の武力を象徴する人物として位置づけられているということも指摘できるであらう。

一方『古事記』の神宝伝承は、垂仁天皇段に次のように記されているにすぎない。

(3) 印色入日子命者、作血沼池、又作狭山池、又作日下之高津池。又坐鳥取之河上宮、令作横刀壹仞口、是奉納石上神宮、即坐其宮、定河上部也。

この記事には、印色入日子命（五十瓊敷入彦命）が血沼池・狭山池・高津池を作ったとも書かれているが、これに対応する『日本書紀』の記事は、垂仁天皇三十五年九月条に、「遣五十瓊敷命于河内国、作高石池・茅渟池」とみえている。

『古事記』においては、印色入日子命が横刀一千口を石上神宮に奉納し、その宮に坐したとあるの

みであって、石上神宮と天皇との関係は明記されていない。ただ、物部氏のことはいっさいみえないのであり、王権の奉斎する神宮として描かれているという点では『日本書紀』と同じである。

石上神宮は、『延喜式』（神名式）には、大和国山辺郡十三座の一つとして「石上坐布都御魂神社」とみえ、布都御魂（フツノミタマ）を祭神としている。フツノミタマについては、『古事記』神武天皇段に、建御雷神が自らの代わりに高倉下のもとに天から降らせたという横刀に注して、「此刀名、云_二佐士布都神_一、亦名云_二甕布都神_一、亦名云_二布都御魂_一。此刀者、坐_二石上神宮_一也」と記されている。『日本書紀』にも同様の話は載せられており（神武天皇即位前紀戊午年六月丁巳条）、そこには石上神宮に坐すとの注記はないが、武甕雷神（建御雷神）が降らせた剣の名を甕霊（フツノミタマ）としている。記紀ともに、神武天皇はこのフツノミタマを得て平定を進めることができたというのであるから、フツノミタマを祭る石上神宮は、この話からも、天皇の奉斎する神宮とみるのが妥当であるといえよう。

また、『日本書紀』には、石上神宮にアジールの性格があつたことを示す伝承も載せられている。たとえば、履中天皇即位前紀には、住吉仲皇子の反乱の際に太子（のちの履中天皇）が石上神宮に逃れたとあり、雄略天皇三年四月条には、廬城部連武彦を讒言した阿閉臣国見が、武彦の父の枳莒噓に殺されそうになり石上神宮に逃げ隠れたとある。これらの伝承も、神宮がある種の公共性を有していたこと、つまり一個の氏（ウヂ）である物部氏ではなく、王権の奉斎する神宮であつたことを示すも

のといつてよいであろう。

そして、次に掲げる『日本書紀』天武天皇三年八月庚辰条からも、それをうかがうことができる。

(4) 遣忍壁皇子於石上神宮、以膏油瑩神宝。即日、勅曰、元来諸家貯於神府宝物、今皆還其子孫。

ここで命じられた措置については、石上神宮の武器庫から「諸氏の兵器を排して皇室の武器庫としての性格に徹せしめ、他方これによつて上級貴族の武備を整えさせようとしたのであらう」との解釈もある。⁽⁴⁾ たしかに、(1)や(3)によれば、石上神宮に収められていた中心は武器である。しかし、『日本書紀』垂仁天皇三十七年八月己卯条に、「令祠官、卜兵器為神幣、吉之。故弓矢及横刀納諸神之社。仍更定神地・神戸、以時祠之。蓋兵器祭神祇、始興於是時也」とあることによく示されるように、武器（兵器）は祭器（神幣）としての性格も有していたことが明らかである。「元来諸家貯於神府宝物」というのは、すでに多くの指摘がある⁽⁵⁾とおり、諸豪族から大王への服属の証として献上された宝物とみるのが妥当であらう。(2)の後略部分には、丹波国から献上された勾玉について「是玉今有石上神宮也」とあり、翌八十八年七月戊午条には、新羅の王子の天日槍が新羅から将来した神宝が「神府」（石上神宮の神庫）に収められたという話もみえる。

石上神宮に大王への服属を示す神宝が収められていたのであれば、やはりそれは、大王の主斎する神宮であつたと考えるのが自然であろう。また、石上神宮に派遣されたのが忍壁皇子（天武天皇の皇子）であつたことも注意されてよい。

さらに、時代は下るが、『日本後紀』延暦二十四年二月庚戌条にも、石上神宮とその神宝の性格をよく示す記事が載せられている。長文ではあるが、そのまま引用しておきたい。

(5)造石上神宮使正五位下石川朝臣吉備人等、支度功程、申上単功一十五万七千余人、太政官奏之。勅曰、此神宮所以異於他社者何。或臣奏云、多収兵杖故也。勅、有何因縁、所収之兵器。奉答云、昔来天皇御其神宮、便所宿収也。去都差遠、可慎非常。伏請卜食而運遷。是時、文章生從八位上布留宿禰高庭、即脩解申官云、得神戸百姓等款偁、比来大神頻放鳴鏑、村邑咸怪。不知何祥者。未經幾時、運遷神宝。望請奏聞此状、蒙從停止。官即執奏。被報宣偁、卜筮吉合。不可妨言。所司咸来、監運神宝、収山城国葛野郡訖。無故倉仆、更収兵庫。既而聖体不予。典闡建部千繼、被充春日祭使。聞平城松井坊有新神、託女巫。便過請問、女巫云、今所問、不是凡人之事。宜聞其主。不然者、不告所問。仍述聖体不予之状。即託語云、歷代御宇天皇、以慇懃之志、所送納之神宝也。今踐穢吾庭、運収不當。所以唱天下諸神、勒諱贈天帝耳。登時入京密奏。即詔神

祇官并所司等、立_二帷_一於神宮、御飯盛銀笥、副御衣一襲、並納_二御輿_一。差_二典闈千繼充_一使、召_二彼女巫_一、令_レ鎮_二御魂_一。女巫通宵忿怒、託語如_レ前。遲明乃和解。有_レ勅、准_二御年數_一、屈_二宿德僧六十九人_一、令_レ誦_二經_一於石上神社。詔曰、天皇御命_爾坐、石上乃大神_爾申給_{波久}、大神乃宮_爾収_{有_志器仗_乎}、京都遠_久成_{奴流_爾}依_弓、近_{処_爾}令_レ治_{牟止_弓奈母}、去年此_爾運収_{有_流}。然_爾比來之間、御体如_レ常不_二御坐_一有_爾、大御夢_爾覺_{志_爾}依_弓、大神乃願坐_{之_爾}任_爾、本社_爾返収_{弓之}。无_レ驚_久、无_レ咎_久、平_久安_久可_二御坐_一止_{奈母}念_{志_爾}食。是以鍛冶司正從五位下作良王・神祇大副從五位下大中臣朝臣全成・典侍正五位上葛井宿禰広岐等_乎差_レ使_弓、礼代_乃幣帛、并鏡令_レ持_弓、申出給御命_乎、申給_止申。辞別_弓申給_久、神_{那我良母}皇御孫_乃御命_乎、堅磐_爾常磐_爾、護奉幸_閉奉給_{閉止}、称辞定奉_{久止}申。遣_二典藥頭從五位上中臣朝臣道成等_一、返_二納_一石上神社兵仗。

これによれば、前年の延暦二十三年（八〇四）に石上神宮の兵杖（神宝）を山城国葛野郡に収めたが、天皇の病氣など不祥事が生じたため、女巫の託宣や天皇の夢に示された石上大神の願いにより、石上神宮に返納させることにしたというのである。石上神宮の神宝については、「昔来天皇御_二其神宮_一、便所_二宿収_一」のものであり、「歴代御宇天皇、以_二殷懃之志_一、所_二送納_一之神宝」であるとされている。この記事からは、石上神宮とその神宝が、天皇の守護神的機能・鎮魂機能を有するものとみなされていたことがえるのであり、⁽⁶⁾九世紀はじめの段階において、石上神宮が歴代天皇の奉斎する

神宮と認識されていたことは明らかである。

以上述べてきたことからすれば、石上神宮の奉斎者が物部氏ではなく、天皇（大王）であったということは、ほぼ確認できたといつてよいであろう。

二 神宝の管掌形態

次に、石上神宮の神宝の管掌形態についてであるが、『日本書紀』垂仁天皇三十九年条⁽¹⁾の本文では、管掌者を五十瓊敷命、すなわち王族であるとし、その分注では物部首とし、同八十七年条⁽²⁾では王族（五十瓊敷命、大中姫命）から物部氏（物部連）に移動したとしている。この点は、どのように考えたらよいのであろうか。

(1)の分注にいう物部首は、「春日臣族」の市河を始祖とするとあり、物部連とは別系のウヂであり、天武十二年（六八三）九月に連のカバネを賜与され、その後、ウヂ名を布留と改め、翌年の十二月に布留連から布留宿禰に改賜姓されている。⁽⁸⁾そして『新撰姓氏録』大和国皇別の布留宿禰の譜文にも、(1)の分注に対応する次のような記事が載せられている。

(6) 布留宿禰

柿本朝臣同祖。天足彦国押人命七世孫米餅搗大使主命之後也。男木亥命。男市川臣。大鷦鷯天皇御世、達倭賀布都努斯神社於石上御布瑠村高庭之地、以市川臣為神主。四世孫額田臣。武藏臣。齊明天皇御世、宗我蝦夷大臣、号武藏臣物部首并神主首。因茲失臣姓、為物部首。男正五位上日向、天武天皇御世、依社地名改布瑠宿禰姓。日向三世孫邑智等也。

石上神宮の神宝管掌者、言い換えれば神庫（神府）の管理者については、物部連—物部首という職務上の上下関係をもつて両者がその任に当つたとみるのが一般的である。⁽¹⁰⁾しかし、物部氏の盛衰の問題や、(1)(2)の記事に対する評価も関係し、議論は複雑なものとなっている。

たとえば、横田健一氏は、物部連の台頭する六世紀以降、管掌者は物部連に固定したが、それ以前は固定しておらず、物部首が管理に当つたこともあれば物部連が当つたこともあつたとされる。⁽¹¹⁾また加藤謙吉氏は、物部守屋が討たれたのちは、蘇我氏によつて物部連の権限は奪われていき、物部首は蘇我氏に掌握され、物部連は石上神宮から排除されていたが、乙巳の変後、物部連—物部首の形態に復帰したとされる。⁽¹²⁾本位田菊士も、物部守屋が討たれたのちの変化を想定され、物部首が石上神宮に関与するようになったのは、物部連の没落後、蘇我氏の後ろ盾によるものであるとし、(1)の分注は、『日本書紀』編纂時に石上神宮の祠官であつた布留宿禰（物部首）に配慮して造作されたのではないかとされている。⁽¹³⁾これに対して長家理行氏は、石上神宮の神宝は天武朝を境に刀の時代から仗の時代

へと転換していったとして、持統天皇の即位式において石上麻呂が大楯を立てていること（持統紀四年正月朔条）に着目し、物部連が管掌したとする(2)を、天武朝以降の作文であるとされる⁽¹⁴⁾。また、泉谷康夫氏も、物部連の管掌は伝承上だけのものであり、(2)は事実ではないとされている⁽¹⁵⁾。

結論からいえば、(2)は長家氏・泉谷氏らの説かれるとおり、『日本書紀』編纂段階の作文、すなわち石上麻呂が台頭し、天皇の奉斎する石上神宮の祭祀に深くかわるようになった天武・持統朝以降の作文、とみるのが妥当と考えられる。ただ、それだからといって、それ以前は、物部連が石上神宮と無関係であったということではないと思う。

まず、物部首の神宝管掌についてであるが、これは事実と認めてよいであろう。(1)の分注には、その前半部分に、十箇の品部を五十瓊敷皇子（五十瓊敷命）に賜ったとして具体的にその名を掲げるが、それらは石上神宮の祭祀に関わった部集団とみられ、何らかの原資料に基づいた記事と推定される。なおこの部分からは、王権の武器庫としての石上神宮の成立が、部制の成立後であったことも推定されるであろう。

(1)の分注の後半部分（春日臣族の市河に神宝を管掌させたとする部分）に対応するのが、(6)の布留宿禰の譜文であるが、(6)には、(1)の分注からのみでは作文し得ない独自の伝えがみえている。すなわち、(6)によれば、市川臣が石上神宮の神主となったのは仁徳朝のこととするが、この市川臣は、(1)の分注の市河と同一人とみて間違いないであろう。(1)の分注が垂仁天皇三十九年条にかけて記されている

ることからすると、一見両者は矛盾するようにみえる。ただ、(1)の分注には「然後」と書かれているのであって、市河が神宝を管掌するようになったのが仁徳朝のことであつたとしても、必ずしも矛盾ということにはならない⁽¹⁶⁾。もちろん、これを事実の伝えとみることはできないのであるが、独自の伝承であることは認められるであらう。

また、武藏臣が宗我蝦夷大臣によつて物部首と名づけられたため臣姓を失つたというのも、(6)独自の伝えである。これは、『日本書紀』皇極天皇二十年壬子条に「蘇我大臣蝦夷、縁_レ病不_レ朝。私授_二紫冠於子入鹿、擬_二大臣位_一とあるのを受け、蘇我蝦夷の専権によつて貶姓されたと主張したものと推測され、やはり事実の伝えとは考え難い。しかし武藏臣の子とされる日向は、壬申の乱において、近江朝廷から穂積臣百足とその弟の五百枝とともに倭京に興兵使として遣わされた物部首日向のこと⁽¹⁷⁾であり、実在の人物と考えられる。物部首日向が倭京に派遣されたのは、物部首の一族が石上神宮の神宝管理（武器庫の管理）に當つていたからと考えてよいであらう。

さらに、(5)『日本後紀』延暦二十四年二月庚戌条によれば、石上神宮の神宝を山城国葛野郡に遷した時（前年の延暦二十三年）⁽¹⁸⁾に、布留宿禰高庭が、それを停止するよう申請したとあり、これは、九世紀初頭の段階においてなお、布留宿禰（物部首）の一族が石上神宮の神宝にかかわっていたことを示すものである。

これらのことからすれば、物部首（布留宿禰）が神宝管掌に當つたことは、事実とみて間違いない

といふ。そしてそれは、王権の神庫・武器庫としての石上神宮が創立された当初からと考えるのが妥当であろう。

(1)の分注によれば、石上神宮に神宝（刀一千口）を納めた当初から、物部首の始祖である市河がその管掌に当たったとするのであり、(6)においても、市川（市河）は石上神宮創建当初からの神主であつたとされている。物部首は、のちに布留の地名をウチ名としてのことからすると、布留の地、すなわち石上神宮の所在地付近を本拠とした一族と推定されるのであり、石上神宮の神庫が建立された当初から、その地の豪族である物部首が、その現地管掌者の地位（すなわち物部首）に任じられたということが考えられるのである。

これに対して、物部連が代々の管掌者であつたとする(2)の記事は、『先代旧事本紀』の「天孫本紀」を除くと孤立した記事であり、その内容も具体性を欠いている。「諺曰、天之神庫随_二樹梯_一之、此其縁也」とあるなど、いかにも物語的である点も指摘できるであろう。

また、兄の五十瓊敷命から神宝の管掌を頼まれ、「手弱女人」であるからとして辞退し、物部十千根大連に神宝を授けて治めさせたという大中姫命は、『日本書紀』では垂仁天皇と皇后の日葉酢媛命とのあいだの第三子とされるが、『古事記』では、それに相当するのは大中津日子命であり、所伝に違いがみられる。『古事記』の大中津日子命は、「山辺之別、三枝之別、稲木之別、阿太之別、尾張国之三野別、吉備之石无別、許呂母之別、高巢鹿之別、飛鳥君、牟礼之別等祖也」とされており、系譜

制度のなかに位置づけられている人物であり、垂仁天皇と日葉酢媛命とのあいだの第三子は、『古事記』にいう大中津日子命とするのが本来の伝えであつたとみてよい。

つまり『日本書紀』は、大中津日子命を大中姫命に変えたことになるが、おそらくその理由は、つぎの二点に求められるであろう。一つは、(2)の話を、倭大国魂神を最初は淳名城入姫命に祭らせようとしたところ失敗したため大倭直の祖の長尾市に祭らせたという話になぞらえたこと。いま一つは、(1)の分注に神宝はいったん忍坂邑に収められたとあることから、允恭天皇の皇后の忍坂大中姫命の存在と、大中姫命（本来の伝えでは大中津日子命）とを結びつけたことである。⁽²⁰⁾すなわち(2)は、(1)の分注や、他の『日本書紀』の伝えを参考に、『日本書紀』編纂段階で作成された記事と考えられるのである。

坂本太郎氏は、(2)の記事を石上氏の家記（墓記）に基づいたものと推定されているが、⁽²¹⁾そこには当然、石上麻呂の関与が考えられるであろう。麻呂が石上のウヂ名を賜与されたことと、物部連が石上神宮の神宝を管掌したとするこの記事の作成とは、明らかに関連するものと考えられる。

さてそこで、物部連と物部首の関係についてであるが、(2)は作文であっても、両者の関係は、実際に統属関係にあつたとみてよいであろう。物部首は、石上神宮の神宝管掌に当つた物部を率いた在地の伴造であり、物部連は、それも含めた各地の物部（およびその伴造）を統轄した職（地位）であつたと考えられるからである。したがって、石上麻呂が石上神宮の祭祀に深くかわるようになる以前

も、物部氏は、けっして石上神宮の神宝管掌と無関係であったとはいえないのである。

加藤謙吉氏は、物部守屋滅亡後は蘇我氏が物部首の一族を掌握し、物部連は石上神宮から排除されたと説かれるのであるが、守屋が討たれたからといって物部氏が滅亡したのではなく、各地に設置された物部とその在地伴造を統括する地位としての物部連は存続し、その地位は物部氏の一族が世襲していったと考えられる。たしかに、(6)には「宗我蝦夷大臣、号武藏臣物部首并神主首」とあり、物部首が蘇我氏の掌握下にあったと思わせるような記述も存在する。しかしこれは、先に述べたように、布留宿禰（物部首）が本来は臣姓であったことを主張するための作文（『日本書紀』に載る蘇我氏の専権記事を利用した作文）と考えられるのであり、事実の伝えとみるのは困難である。また『紀氏家牒』にも、(6)と対応した記事がみえるが、これについては、加藤氏自身が詳細に検討されているとおり、『日本書紀』や(6)の記事（物部首一族の伝承）などから作文したものとみて間違いなく、やはり事実の伝えとみることはできない。

要するに、石上神宮の神庫に収められた神宝の管掌形態は、当初から、物部連の統率下にあった物部首を現地管掌者とする形態（物部連―物部首という職務上の上下関係をもつて管掌する形態）であったと考えられるのである。そしてそれは、部制が廃止されるまで、基本的な変化はなかったとみてよいであろう。

なお、物部首による神宝管掌（現地における管掌）が事実とするならば、(1)の分注の記事内容は、

石上神宮の成立を考える上でも重要な材料になる。最後に、石上神宮の成立について、若干の憶測を加えておくことにしたい。

まず、五十瓊敷皇子が茅渟菟砥河上で大刀一千口を作った時に十の品部を賜ったとあるのは、先にも述べたとおり、石上神宮に収められた武器が、実際には品部制成立後に作製されたものであることを推定させるであろう。またその武器が、茅渟菟砥で作製され、いったん忍坂邑に蔵されたのちに石上神宮に収められたとあるのも、なんらかの事実に基づいた話と考えられる。

茅渟は和泉地方の古名であり、菟砥は『延喜式』（諸陵式）に「宇度墓（五十瓊敷入彦命。在和泉国日根郡。兆域東西三町、南北三町。守戸二烟。）」とみえる和泉国日根郡の宇度（菟砥）である。(3)『古事記』には「鳥取之河上宮」とあるが、この鳥取も『和名類聚抄』に日根郡鳥取郷とみえる鳥取に比定できる。この地に鍛冶集団が存在していた可能性については、横田健一氏によって詳しく検討されているところである。⁽²⁴⁾ また忍坂の地は、『和名類聚抄』の大和国城上郡忍坂郷に比定され、和泉地方と石上の地（同じく大和国山辺郡石上郷に比定される）とを結ぶ交通路上に位置し、石上、忍坂の地それぞれが、交通上の要衝の地でもあったといえるのである。⁽²⁵⁾

石上の地に宮を置いたという伝承を持つ天皇は、石上穴穗宮の安康天皇と、石上広高宮の仁賢天皇であり、実在したとするならば五世紀代の大王であるが、その実在や宮の伝承については疑問も持たれるであろう。しかし、欽明天皇の皇子の一人に石上部皇子の名がみえ、⁽²⁶⁾ 御名代としての石上部の存

在が認められること⁽²⁷⁾からすれば、六世紀に石上宮（王宮としてとは限らない）が存在したことは確かと考えられる。一方、忍坂の地に、遅くとも六世紀はじめの段階で宮のあったことは、隅田八幡宮所蔵人物画像鏡銘に「意柴沙加宮」（オシサカ宮）の表記がみえることから確認できる。そしてそのオシサカ宮も、刑部がその御名代と考えられることからすると、六世紀代に（およびそれ以降も）維持されたことが推定できる。六世紀段階において、石上・忍坂の両地に王権の拠点があったことは間違いないであろう。

大王を奉斎者とし、多くの武器（祭器としての性格も有する）を所蔵し、諸豪族から服属の証として献上された宝器も所蔵するという、王権の宗教的拠点としての石上神宮の成立は、おそらく種々の部の制度が整い、王権の超越化が進んだ六世紀代のことと考えられる。ただこのことは、それ以前に石上の地に何らかの宗教的施設があったことを否定するものではない。⁽²⁸⁾

注

（１）『先代旧事本紀』は、聖徳太子が蘇我馬子らに命じ勅を奉じて編纂した書物であるとの序がついているが、実際は平安時代の初め頃に、物部氏系の人物によって編纂されたものとみられている。鎌田純一『先代旧事本紀の研究』研究の部（吉川弘文館、一九六二年）。

（２）『先代旧事本紀』の記事が、『日本書紀』などを参考にして作成されたものであることは、すでに明らかにされているといつてよい。坂本太郎『纂記と日本書紀』（『史学雑誌』五六―七、一九四六年。のち、同『日

本古代史の基礎的研究』上、東京大学出版会、一九六四年、さらに、坂本太郎著作集第二卷『古事記と日本書紀』吉川弘文館、一九八八年、に収録）。阿部武彦『先代旧事本紀』（坂本太郎・黒板昌夫編『国史大系書目解題』上巻、吉川弘文館、一九七一年）など参照。

(3) 分注は〈 〉で括って記すこととする。以下同じ。

(4) 日本古典文学体系『日本書紀』下、四一六頁頭注一。

(5) 野田嶺志「物部氏に関する基礎的考察」〔『史林』五一―二、一九六八年〕。泉谷康夫「服属伝承の研究」〔『日本書紀研究』四、一九七〇年。のち、同『記紀神話伝承の研究』吉川弘文館、二〇〇三年に収録〕。長家理行「物部氏族伝承成立の背景」〔龍谷史壇』八一・八二、一九八三年〕。松倉文比古「石上神宮の神宝管治とその性格」〔国史学研究』一〇、一九八四年〕。亀井輝一郎「石上神宮と忍坂大中姫」〔『日本書紀研究』一三、一九八五年〕。高嶋弘志「出雲国造の成立と展開」〔古代王権と交流』出雲世界と古代の山陰』名著出版、一九九五年）など。

(6) この点は、すでに野田嶺志「物部氏に関する基礎的考察」〔前掲〕、長家理行「物部氏族伝承成立の背景」〔前掲〕、松倉文比古「石上神宮の神宝管治とその性格」〔前掲〕などにおいて指摘されている。

(7) 『日本書紀』天武天皇十二年九月丁未条。

(8) 『日本書紀』天武天皇十三年十二月己卯条。

(9) なお、摂津国皇別の物部首は、この布留宿禰と同系であるが、河内国神別の物部首は、「同神（神饒速日命）子味鳥乳命之後也」とあって、石上朝臣（物部連）と同系である。

(10) 津田左右吉『日本上代史の研究』〔岩波書店、一九四七年。のち『津田左右吉全集』第三巻、岩波書店、一九六三年、に収録〕。野田嶺志「物部氏に関する基礎的考察」〔前掲〕。松倉文比古「石上神宮の神宝管治とその性格」〔前掲〕など。

(11) 横田健一「物部氏祖先伝承の一考察」〔『日本書紀研究』八、一九七五年。のち、同『日本古代神話と氏族

伝承」塙書房、一九八二年、に収録。

(12) 加藤謙吉「蘇我氏と大和王権」(吉川弘文館、一九八三年)。

(13) 本位田菊士「物部氏と石上神宮」(『東アジアの古代文化』三六、一九八三年)。

(14) 長家理行「物部氏族伝承成立の背景」(前掲)。

(15) 泉谷康夫「物部氏と宗教」(『日本書紀研究』一六、一九八七年。のち、同『記紀神話伝承の研究』前掲、に収録)。

(16) 佐伯有清「新撰姓氏録に関する諸疑点の究明」(同『新撰姓氏録の研究』研究篇、吉川弘文館、一九六三年)に、この指摘がある。

(17) 『日本書紀』天武天皇元年六月丙戌条。

(18) 『日本後紀』延暦二十三年二月庚戌条に、「運取大和国石上社器仗於山城国葛野郡」とある。

(19) 『日本書紀』崇神天皇六年条・七年条、および垂仁天皇二十五年三月丙申条分注にこの話がみえる。

(20) (2)における神宝管掌者の五十瓊敷命→大中姫命→物部十千根大連という移動が、(1)の分注における神宝の茅渟→忍坂邑→石上神宮という移動に対応するという指摘は、すでに亀井輝一郎氏によってなされている。亀井輝一郎「石上神宮と忍坂大中姫」(前掲)。なお、亀井氏は、忍坂大中姫命の実在性は高く、実際に石上神宮の成立に関わっていた可能性が高いとして、石上神宮の成立を五世紀代に求められている。亀井氏の論点は多岐にわたっており、そのすべてをここで検討することはできないが、忍坂大中姫命については、川口勝康氏の説かれるとおり(川口勝康「在地首長制と日本古代国家」『歴史学研究』別冊、一九七五年大会報告。同「五世紀の大王と王統譜を探る」『巨大古墳と倭の五王』青木書店、一九八一年、など)、複数の伝承上の王統譜を一系列のものとして結びつけるためのナカツヒメ婚の役割を負わされた一人とみられるのであり、実在性は低いのではないかと思う。

(21) 坂本太郎「纂記と日本書紀」(前掲)。

(22) 注(12)に同じ。

(23) (6)に対応する『紀氏家牒』の記事は、次のとおりである。

馬子宿禰男蝦夷宿禰家葛城豊浦里。故名曰「豊浦大臣」。亦家多貯兵器。俗云「武蔵大臣」。母物部守屋大連（亦曰「弓削大連」）之妹名云「太媛」也。守屋大連家亡之後、太媛為「石上神宮扇神之頭」。於是蝦夷大臣以「物部族神主家等」為僕、謂「物部首」、亦云「神主首」。

(24) 横田健一「物部氏祖先伝承の一考察」(前掲)。

(25) 亀井輝一郎「石上神宮と忍坂大中姫」(前掲) 参照。

(26) 『日本書紀』欽明天皇二年三月条。

(27) 石上部をウヅ名とする八世紀の人名は多く残されており、また『日本書紀』仁賢天皇三年二月朔条に、石上部舎人を置いたとの記事がみえる。

(28) 石上神宮の禁足地からの出土遺物には、四世紀代にさかのぼるものも含まれているという。大場磐雄「石上神宮」(『神道考古学講座』五、雄山閣出版、一九七二年) 参照。

本稿は、成城大学特別研究「グローバル化に対応した地域社会・文化の継承と再構築に関する研究―実証と理論の両側面から―」(二〇〇七年・二〇〇八年度共同研究) による成果の一部である。